

を中心に報告した。主訴は嘔気、嘔吐が2例、心窩部痛が1例で、食欲不振が全例でみられた。CT所見は2例で拡張した小腸と腫瘤がみられた。1例は小腸壁の著明な肥厚像として描出された。小腸造影では2例が全周性の辺縁不整な狭窄像として描出され、1例はBorrmann II型を思わせる像としてみられた。血管撮影は2例で施行し、1例は特に異常所見がみられず、もう1例では軽度の異常血管と淡い腫瘍濃染像がみられた。いずれの症例も小腸造影及び血管撮影の所見より小腸癌の診断のもとに手術が行われ、病理組織の確認がなされた。CTは進行した小腸病変の存在診断に有効な検査と考えられた。

13) Myelolipoma の4例

古沢 哲哉・武田 敬子
近藤まり子・椎名 真
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

Myelolipoma (骨髄脂肪腫) は主に副腎に発生する良性の腫瘍で、通常 non-functioning tumor であるが、CT や超音波の発達により偶然に発見される機会が増えてきている。

CT 所見の特徴は、病変内の脂肪組織の相対的な量により、脂肪組織優位のものから、軟部組織優位のものまで様々に存在する。

鑑別診断として、後腹膜由来の脂肪肉腫、髄外造血、骨髄脂肪腫以外の副腎腫瘍、血管筋脂肪腫などがあるが、とくに分化型脂肪肉腫では鑑別困難な場合もある。その際、隔壁構造を有する場合、副腎皮質が隔壁を形成していると考えられ、骨髄脂肪腫の診断の一助となる。

確定診断は、CT あるいは超音波ガイド下の吸引細胞診にて、脂肪を含んだ検体中に骨髄巨核球を証明することである。

我々は、4例の骨髄脂肪腫を経験したので文献的考察を加え報告した。

14) 経カテーテル的に止血し得た下腸間膜動脈損傷による後腹膜出血

清野 泰之・三橋 寛
宮崎 治・土師 一史
米山 優実・佐伯 光明 (聖マリアンナ医科)
中島 康雄・大山 行雄 (大学横浜市西部)
作山 攆子 (病院放射線科)

症例は、34才男性。交通外傷により当院救命救急センターを受診した。受診時意識レベルはⅢ-200 (JCS) で検査データ上は DIC を併発していると考えられた。

受診時腹部 CT では左前傍腎腔から連続するようにして大きな血腫が見られ、その内部には extravasation を示唆する high density area が造影上見られた。腹腔内の出血も合わせて見られたため開腹手術が施行された。しかし、手術的には上記血腫の部位確認及び止血が不可能であった。このため経カテーテル的塞栓術が行われた。造影上、左結腸動脈からの extravasation を確認し、金属コイル2個とスポンゼル細片で止血に成功した。しかし、患者は外傷性くも膜下出血と硬膜下血腫が DIC のため増悪し、6日後に死亡した。一般的に、後腹膜出血は保存的に治療されるが、本例の様に後腹膜領域でも増大する血腫は TAE の対象と考えられる。また、これらの診断と治療に対する放射線科医の積極的な対応が患者の救命につながると考えられる。

15) 腎外傷11例の経験

楠田 順子・竹井 亮二 (公立昭和病院)
桜井 賢二 (放射線科)

今回私達は、1988年1月から1990年11月までに11例の腎外傷を経験したので報告した。

内訳は、交通外傷9名、転落2名、年齢は10才から54才、男性10名、女性1名で、腎挫傷2名、腎裂傷2名、腎破裂6名、腎基部損傷1名であった。

腎破裂の5例に、経カテーテル的動脈塞栓術を施行することで、1例の腎基部損傷を除く、全例に受傷腎の正常部をできるだけ温存する治療をすることが可能であった。

腎外傷の治療法については患者の多くが比較的年齢の若いこともあり、損傷腎をできるだけ保存することが重要とされている。

腎外傷に対する治療の一方法として腎機能をできるだけ温存するという意味で、経カテーテル的動脈塞栓術 (TAE) は有用な手段と思われる。

16) 二次性陰影で発見された肺癌症例の検討

一画像所見を中心として一

湯川 貴男・古泉 直也 (荘内病院放射線科)
梅津 尚男

平成元年7月から平成2年10月までに荘内病院で発見された肺癌症例のうち、二次性陰影 (無気肺または閉塞性肺炎) で発見された10例を報告した。

性差では10例すべてが男性で、女性はいなかった。年齢分布では特徴はなかった。

組織型では、扁平上皮癌が6例と最も多く次いで腺癌